

## 「第三世代」マレーシア研究者への期待

—バンギ・フィールドステーション研究会—

山本博之

2005年9月7日、マレーシアで調査研究を進めている日本人大学院生による研究発表がマレーシア国民大学(UKM)のマレー文明・世界研究所(ATMA)で行われた。

この研究会は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と京都大学東南アジア研究所による21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」のバンギ・フィールドステーションの研究活動の一環として行われたものである。ATMAのシャムスル氏による歓迎の挨拶の後、2つの報告と討論が行われた。以下、2人の報告内容をまとめた後、シャムスル氏が彼らを評して言った「第三世代」マレーシア研究者の誕生という発言について考えてみたい。

\*\*\*

### 報告1

「マレーシア政党政治への視覚：70～80年代 UMNO 党内政治を中心に」

(伊賀司・神戸大学国際協力研究科博士課程)

この報告では、1970～80年代のマレーシア政府の経済政策とUMNO党内政治には密接な関係があるとした上で、両者がそれぞれ説明された。それによれば、経済政策は、マレー・ナショナリズムに基づく国家による介入主義的な政策から外資に融和的な自由主義的政策への変更があった。UMNOの党内政治では、ラザレイか

らマハティールへと重心が移っていった。

マレーシアという国家をどのように捉えるかという観点から報告者の議論を言い換えるならば、政府は1970年代にマレーシアを「閉じた場」として捉えていたが、1980年代には「開かれた場」として捉えるようになり、そのために経済政策が変わったとまとめられる。1970年代に外資企業を国有化したことなども、マレーシアを「閉じた場」と見て、その中で富の配分を試みていたと理解できる。これに対し、1980年代に外資への規制を緩和させ、民営化を進めたことなどは、マレーシアを「開かれた場」と見ていたことを示している。フロアからは1980年代にマレーシアは国際経済の中で自立できていなかったらうとのコメントが寄せられたが、これはマレーシアが国際社会の中でバランスをとりながら経済政策を進めていかなければならぬということであり、マレーシア政府がマレーシアを世界に「開かれた場」として見ていたことと合致する。

その上で生じる疑問は、マレーシア政府がマレーシアに対する認識を転換させたとして、そのこととUMNOの党内政治がどのような関係にあるかということである。具体的に言えば、経済政策上の必要がUMNOの党内政治を引き起こしたのか、それともUMNOの党内政治が経済政策を導いたのかという設問である。フロアからも複数の参加者から同様の質問が出された。この議

論の際に、経済政策上の必要が UMNO の党内政治を規定したとは考えにくいとのコメントもあり、「党内政治→経済政策」という方向性が共有されたかのようであった。また、党内政治を左右した要因としては利権が挙げられ、党内政治は利権をめぐる対立と協力によって説明できるとのコメントもあった。

確かに、UMNO の党内政治はしょせん利権で決まるものであり、その結果として経済政策が出されるのだとする説明も、マレーシアにおける政治と経済の関係についての 1 つの説明としてありうるだろう。ただし、この議論には、UMNO の政治家たちが(少なくとも党内政治に勝ち残ってきた政治家たちが)自分の思い通りに経済政策を立案し、実施してきたという前提があるように思われる。

これに対し、報告者の強調点はその点にではなく、1980 年代のマレーシアのバランス感覚を、さらに言えば、この時期のマレーシア政治を担ったマハティールのバランス感覚を指摘することにあつたように感じられた。ラザレイとの関係やムサとの関係といった UMNO 党内のバランスに加え、華人社会などマレーシア国内の諸勢力とのバランス、さらに国際経済の中でのバランスなど、さまざまな局面でマハティールが絶妙のバランス感覚を発揮してきたという観点から現代マレーシアの政治と経済を斬るというのが報告者の意図であるように感じられた。時間の都合もあってこの議論の妥当性はほとんど検討されず、そのことが残念だった。

\* \* \*

## 報告 2

「マレーシア社会における公共圏の形成とイスラーム主義運動」

(塩崎悠輝・国際イスラーム大学マレーシア人文学部)

この報告では、イスラム教に関する概念を整理した後、公共圏に関する概念の整理を行い、本題の入り口を紹介した。それによれば、マレーシアにおけるマスメディアはいずれも政府与党に支配されており、全国規模の公共圏は政府から自由な公共圏として機能していない。これに対し、民族ごと・宗教ごとに設定されるさまざまな公共圏では政府の政策と異なる言論も出されている。その特徴的なものがイスラム指導者、とりわけ PAS 党員による説法である。このような在野の突き上げを受けて、政府与党は先手を打ってイスラム化政策を行った。

フロアからの質問は、マスメディアと PAS の説法をそれぞれ別の公共圏と捉え、前者を全国的なもの、後者を対抗的なものとする報告者の捉え方に対する疑問に集中した。華語メディアを見ても、マレーシアの言論の場を政府と在野に分けて捉えるのは難しく、全体で 1 つの方向性を持っているように見えるとのコメントも寄せられた。報告者はこれに対し、マスメディアと PAS の説法は互いに異なる意見を表明しており、両者の間の議論が成立していないため、互いに場が異なっていると説明した。しかし、報告者自身も認めているように、マスメディアと PAS の説法の間相互の引用や影響があることから考えると、半島部

のマレー人社会においては、マスメディアや PAS の説法を含むさまざまな意見表出の場が全体で 1 つの公共圏を形作っていると理解できるように思われた。

\*\*\*

両氏の報告は、それぞれ個別の報告としてもとても興味深い議論を展開していたが、2 つあわせることでさらに興味深い論点が提示されていたように思われる。それは、半島部マレー人の政治参加の方法として対照的な 2 つのあり方である。一方では、政府に加わり、仲間や支持者を集めて、政策決定の権限を持つ人物と対決し、その地位を奪おうとする方法がある。他方で、在野で活動を続けて人々の支持を獲得し、自らの主宰する場で政府批判を行い、それによって政府に批判封じのための先回りをさせる形で自らの思惑を実現するという方法である。

後者の方法では、対抗する言論の場を利用して政府に政策を実施させるのであって、自分たちの思惑を実現するために政府に参加する必要はないし、まして政権をとる必要もないということになる。(ただし、それではどうして PAS が政党を作って選挙に出ているのかについても何らかの説明を与えてほしかった。)

このように斬新な見方が提示されたのは大いに讚えたい。報告に登場する政治家の綴りを間違えるなど、報告のお作法という観点からは確かにかなり荒削りなところがあった。しかし、研究の中間報告であり、さまざまな意見を戦わせるための材料としては十分なものであって、むしろさまざまなイマジネーションを生み出す契機にあふ

れた報告であったと私には思われた。そこではむしろ、細かい事実関係の誤りを指摘することよりも、その研究発表からどのような議論が引き出せるのかをそれぞれの関心にしながら提供しあい、それが既存の研究蓄積にとってどれだけの挑戦になりうるのかを素直に受け止める場とすることに意義があるのではないかと感じられた。

報告者 2 人は、報告に対してフロアから必ずしも好意的な反応が返ってこなかったと感じたかもしれない。しかし、議論そのものが否定されたのではなく、細かいところでお作法がなっていないと判断されて門前払いを食らったために、議論の中身は十分に検討されなかったと見るべきだろう。議論の中身について検討してもらうためには、お作法の部分についてももう少し気を配り、先行研究を十分に踏まえていないのではないかと思わせたり、基本的な知識が不十分なのではないかと思わせたりしない工夫が必要だろう。

\*\*\*

このような研究報告とその後の質疑応答を聞いていて、冒頭のシャムスル氏の発言の意味が少しわかったような気がした。シャムスル氏は、研究会のはじめに、報告者 2 人を含む若い世代の研究者たちを「マレーシア研究者の第三世代」と呼び、日本のマレーシア研究者の「世代論」を披露してくれた。その内容をどれだけ正確に理解できたかには自信がないが、私が理解した限りで紹介しておきたい。

シャムスル氏によれば、20 年余り前にシャムスル氏が日本人研究者と研究協力を始めるようになった頃、マレーシアを研究していたのはインド

ネシア研究者やインド研究者ばかりだったという。インドネシアやインドで研究者としての実績を積むと、生活環境が楽であるマレーシアにやってきて、インドネシア研究やインド研究の流儀でマレーシア社会を調査し、分析しようとした。それによってマレーシア研究が進んだことは否定できないが、マレーシア社会の研究の登場を待望する気持ちはなくならなかったという。この気持ちを共有できたのは現 JAMS 会長の前田(立本)成文氏だけであり、シャムスル氏は前田氏と 2 人で、いつの日かマレーシアを専門に研究するマレーシア研究者による研究会を実現させたいと語りあったのだという。

その次の世代は、それぞれ文化人類学や教育学や政治学や歴史学など個別の専門分野を持ち、その事例研究のためにマレーシアをフィールドの 1 つとした研究者たちだったという。「第二世代」の研究者たちは、マレーシア社会をさまざまな専門分野から分析し、それによってマレーシア研究がさらに進み、それぞれの専門分野にしたがったマレーシア像が形作られるのに寄与したという。

そして、今回の報告者を含む若手の研究者たちが「第三世代」である。シャムスル氏の意を汲むならば以下のようなになるだろうか。すなわち、「第三世代」とは大学院の修士課程や学部学生など研究者として十分に確立されていない時期にマレーシアで数年間生活する機会を得た人々

であり、その点ですでに社会的に地位が確立された研究者としてマレーシアを訪問した先行する世代と異なっている。したがって、事務手続きや金銭のやり取りや交友・恋愛など、さまざまな場面で自分で交渉していかなければならない。そのような経験を通じてマレーシア社会における人間関係を体得し、それをもとに従来の専門分野ごとに形作られたマレーシア像を批判的に再構築しようとする意気込みを持ったのが「第三世代」の研究者たちである、と。

この世代論は、むしろ日本人のマレーシア研究者全員に関するものではなく、シャムスル氏と密な関係を築いた日本人研究者に限ったシャムスル氏の個人的な印象であり、したがってかなり大雑把な分類でしかない。しかし、それでもこの世代論はとても興味深い。私が大学院にいた頃は「研究対象地域に思い入れが持てない」と悩む院生をよく見かけたが、最近では研究対象地域への思い入れは当然の前提であり、それと研究をどう両立させるかという悩みの方を多く聞くようになったという私の個人的な経験とも繋がるものである。

研究対象社会が単なる研究対象ではなくなっているが、しかし研究は研究として確立させたいし、その上で研究対象社会との関わりも維持したい、そういう思いを抱いている「第三世代」の研究活動が今後ますます盛んになることに、当事者の 1 人として期待している。